

# 古代難波地域における開発の諸様相

## —難波津および難波京の再検討—

佐藤 隆

---

**要旨** 本論では古代難波地域で行なわれた開発について、以下に挙げるふたつの主題を中心に検討して新たな考え方を示した。

そのひとつめは難波津に関することである。5世紀に始まる難波地域の開発において、上町台地やその周辺にはさまざまな施設や倉庫群、手工業の工房などがおかれ、都市的な様相をもち、難波遷都へつながっていく。難波津はこうした難波地域の繁栄を外交や流通の拠点として支えた。本論では初期の難波津の位置推定に関わる考古資料を再整理して、新たな評価を行なった。

ふたつめは難波京に関することである。難波遷都の後、難波京の地割が成立する時期は天武朝（7世紀第4四半期）とこれまで考えられてきた。それに対して、本論では7世紀第3四半期に遡る可能性を指摘するとともに、遷都前に見られた都市化の影響を受けながらさまざまなかたちの開発によって地割が形成され、それらが中世につながっていく流れを考察した。

---

### はじめに

645年の乙巳の変を契機として、都は飛鳥から難波へ遷された。『日本書紀』孝徳紀大化元年冬12月癸卯条には「天皇遷都難波長柄豊碕」とあるが、遷都の実際はいくつかの宮を経てようやく難波長柄豊碕宮に遷御したという流れであることは、現在の研究者間でほぼ定説として理解されている。こうした諸宮に関する検討の手がかりとして、その前代から史料に見られる「大郡」「小郡」「難波屯倉」「難波館」「難波津」に関しても分厚い研究史が存在する。

吉田晶氏は難波地域におけるこれらの施設（「難波屯倉」を「施設」と呼ぶには概念の整理が必要であるが）を背景に古代氏族が盛んに活動する姿を「都市的な様相」と捉え、藤原・平城・長岡・平安といった他の都城とは異なり、難波地域は宮殿が造営される以前から都市的性格をもっていたことを指摘した〔吉田1982〕。近年、南秀雄氏は史料からの議論が大半であった難波地域の「都市」の成立過程や様相について、連携する研究者の成果<sup>1</sup>を引きながら考古資料の面から追究している〔南2018〕。古地形や手工業生産に関わる遺構・遺物の分析から難波地域における「施設」の分布や生業の姿を描く点で説得力のある業績である。南氏は5世紀の法円坂倉庫群から7世紀前半の前期難波宮造営前までの遺跡を対象に「都市化」を3段階に分けて、その各段階の歴史的発展について述べる。また、積山洋氏は研究史の詳細な整理を行ないながら、南氏とは異なる枠組みで都市化の第一段階・第二段階を設定している〔積山2015〕。両氏の研究は、いずれも遷都前<sup>2</sup>に難波地域がすでに都市的な性格を備えていたことを示し、この地が都に選ばれた要因や当時の政治情勢を考えるうえで重要な視点を提

供しているが、共通して言えることは、遷都前の難波地域の「都市化」に連続するかたちでの「都」となった同地域への言及がない点である。

遷都が行なわれたから難波地域は当然「都市」になったと一般には受け取られるかもしれないが、遷都後においてもさまざまなかたちでの開発が各所であり、地域全体が均一に「都市」に向かったわけではない。積山氏は別の論文で、遷都後の難波地域において「難波京」が段階的に発展する姿を、初期難波京（難波京Ⅰ期）・前期難波京（同Ⅱ期）・後期難波京（同Ⅲ期）として整理している〔積山2013〕。これについても、筆者は調査成果を再吟味することで異なる展開が描けるのではないかと考えている。条坊をかなり明確に備えた他の都城遺跡（これらもまた、単純には語れないことは重々承知しているが）と比較して「難波京」のあり方は特徴的であり、それは遷都前の「都市的様相」にも影響を受けたものと言えそうである。現在得られている考古資料が十分に詰められているのか、そしてそれらはどのように関連し合うのかについて検討が必要と考える。

こうした問題意識をもとに、本論ではまず、遷都前、遷都後を通じて難波地域の「都市」としての重要な構成要素のひとつであり続けた難波津の位置推定について取り上げ、開発の始まりの状況を整理する。次いで、古代の「都市」を象徴する条坊の問題について、主に調査地点ごとの年代観や開発の目的を再確認することによって、積山氏とは少し異なった「難波京」の姿を示すとともに、それがどのように中世へつながるかを考察してみたい。

## 1. 上町台地と難波津

### 1) 難波宮下層遺跡と難波津に関する研究史の整理

これまでの研究の動向については積山洋氏によって詳細にまとめられている〔積山2015〕。難波津をはじめとして難波館、難波屯倉といった7世紀中頃の難波遷都以前にこの地におかれていた「施設」に関して、主として史料の検討によって研究が進められてきた〔直木1994、門脇1991、吉田1982など〕。近年の研究成果としては鷺森浩幸氏や西本昌弘氏、栄原永遠男氏の論考がある〔鷺森2014・西本2014・栄原2017〕。

一方、難波遷都以前の考古資料としては、昭和29年（1954）から始まった難波宮跡の調査において難波宮の遺構に先立って存在する「難波宮下層遺跡」と呼ばれる遺構・遺物が認識されている。これらは『日本書紀』に記される施設との関わりなどが断片的に述べられることもあったが、遺構の全体像や年代観が明確でなかったこともあって、議論は単発的であった。こうした状況が大きく変わったのは1987年から始まった旧大阪市立中央体育館敷地における発掘調査である。この調査においては、16棟からなる5世紀代の大規模な倉庫群が見つかり、また、それらの遺構に後続し、前期難波宮の遺構に先行する建物群がかなりまとまった平面規模で把握された。南秀雄氏は調査担当者の一員として発掘調査報告書における上記部分の執筆を担当し〔大市協1992〕、その後も、都市とは何かの指標を理論的に整理しながら考察を進めている〔南2018など〕。これらの成果のなかで、5世紀の法円坂倉庫群は設計・施工においてそれまでわが国にはない革新的な技術が用いられ、規模も当時の頂点に位置づけられるという評価が与えられ、その後に現れて前期難波宮に先行する建物群については「難波

屯倉」を構成するものという理解が深められてきた。

難波津は上に挙げた「施設」を支え、ともに発展した古代の港である。上町台地北端部で5世紀の法円坂倉庫群が現れる頃には成立していたと考えられている。「難波館」などの名前が史料に見られる6世紀代にはすでに外国の使節を迎える港として機能しており、この位置推定は「施設」の配置を検討するうえでも重要な手がかりになる。これまで千田稔氏の中央区三津寺付近という説と、日下雅義氏による中央区高麗橋付近という説が研究史においては代表的で



図1 難波津推定範囲（〔松尾2014〕図5を引用）

ある。近年の大坂城跡・大坂城下町跡における発掘調査例の蓄積によって、上町台地とその周辺の沖積地の詳細な古地理変遷が理解できるようになってきた〔趙2004、趙ほか2014、趙2017、趙・中条2017など〕。松尾信裕氏はこうした成果をうけて、古代の難波津が東横堀川北端部の東西に広がる低地部分に埋没している旧大川岸に存在したと推定している（図1〔松尾2014〕）。

## 2) 5・6世紀における難波津の開発に関わる考古資料

ここでは、難波津成立期の位置推定について出土遺物をもとに検討する。松尾信裕氏が図1で示した難波津は、8世紀後半あたりから9世紀前半にかけて出土遺物が増えてくる地域（その後、渡辺津につながる）のことで、5世紀の成立期から7世紀頃の難波津についても他に推定できる場所はないとする。その一方で、古墳時代の遺物が出土する地点として大坂城下町跡東北部のO S 86-20次、A Z 87-5次、O J 91-11次といった調査地を挙げて、これらの調査地では遺物が基本的に水成の自然堆積層から出土していることから、東方の上町台地に存在する遺跡から大川の流れによって運ばれてきたものと述べる〔松尾2018〕。しかし、この考え方には次に挙げるような大きな疑問点がある。

まず、たとえばO J 91-11次調査の水成堆積層である第10層上部・下部〔大市協2004〕では、遺物にほとんど磨滅したものが見られず、完形の土器などを含めて直径10cm以上の大きな破片が多量に含まれており（上部には瓦も含まれていた）、それらが隣地のO J 92-18次調査地の同様の層準には見られないことである。これだけの破片を運ぶほど勢いのある氾濫があったのなら、もっと広範囲に遺物が散布するのではないか。

次に、O J 91-11次調査の水成堆積層である第10層上部・下部は調査時から区分して遺物が採取されており、上部の土器は8世紀後半～9世紀初頭が主体で6・7世紀の遺物をわずかしき含まないのに対して、下部の土器は7世紀の土器が主体で5・6世紀の土器も含むが、8世紀以降の土器をわずかしき含まないという年代差が見られることである。これらが大きく2度の氾濫で上町台地の西北部あたりから運ばれてきた遺物であると仮定すれば、水の流れは周辺のさまざまな時代の遺構や遺物包含層を削り込んできたはずであるが、その結果として、第10層の上部と下部のように都合良く時代が分かれて堆積するものであろうか。むしろ、こうした堆積状況はこれらの地層に含まれる土器がごく近くの遺構や遺物包含層に由来するものであることを示すと考える。

また、松尾氏が古い段階での難波津に想定している上町台地西北部では、特に現在の東横堀川の前身であるラグーンに近い縁辺部において、5～6世紀の遺物が集中して出土している調査例が今のところほとんど確認できないことである。近年の古地理変遷の研究〔大市研・大歴博2014ほか〕において示されている古地理図をもとに、図2では東横堀川周辺（谷町筋以西）の5世紀から6世紀前半の遺物が確認できる地点を★で示してみた（谷町筋以东は省略）。また、筆者はO J 91-11次調査地の出土資料のうち、第10層上部・下部として報告されている水成堆積層から出土した土器の未報告分を



図2 東横堀川付近における5世紀～6世紀前半の遺物出土地点  
〔大市研・大歴博2014〕巻頭図版5－部分を下図として引用および加筆

実見して再整理を行なった。その結果、下部の資料に5世紀から6世紀前半の土器が一定数含まれていることを確認した。詳細は別稿で紹介する予定であるが、土師器高杯・甕、朝鮮半島系軟質土器の甕・平底鉢・甌、須恵器蓋杯・高杯・甕などがある。同時期の土器はその周辺のOS86-20次、AZ87-3次・87-5次調査でも集中して出土している〔大市協2004〕。大坂城下町下層では8・9世紀に遺構・遺物の分布が西へ拡大するが、そうした地域では5・6世紀の土器はほとんど見られない。

こうした疑問点に対する答えとしては、やはりそれほど遠くない地点で投棄された遺物が、生活面が削平されて再堆積したという動きを考えざるをえない。松尾氏も大川の流路の移動や氾濫、水域の変遷などによって集落の移動や港の位置の移動が起こったと述べており、古墳時代の遺物はこうした動きのなかで積極的に評価すべきであろう。また、たとえば、同調査地から南西へ約350mの位置にあるOJ92-33次調査地〔大市協2004〕では豊臣期城下町の地層の下位で8世紀後半や10世紀の井戸が検出されているが、いずれも最下部の井戸側と水溜が残る程度であったことから、古代の生活面はもちろんのこと、その下位の遺物包含層や盛土層が少なくとも1m以上は削平されていることがわかる。同様の事例としてはOJ91-11次調査地の南方に位置するOJ96-11次調査地〔大市協1999〕やOJ02-3次調査地〔大市協2003〕でも8世紀の井戸が深さ1m以下しか残っていない状態で見つっている。こうした事例をみると、豊臣期城下町の生活面が形成されるまでに、古代以前の生活面が井戸くらいの深い遺構しか残らないほどに削平された地点があることがわかる。したがって、上に挙げた5・6世紀の遺物が集中する事例も、こうした地点にあった遺構や遺物包含層の遺物を起源とする可能性が高い。

### 3) 遷都前後の上町台地と難波津

ここまで5・6世紀の難波津における出土遺物を再検討し、推定位置をあらためて確認した。同時期の上町台地については、田中清美氏によって消費地である「難波宮中部地区」「難波宮北部地区」と、手工業の生産地である「難波宮東部地区」「難波宮南部地区」という関係が遺構・遺物により整理されている〔田中2014a・b〕。窯や工房といった生産に関わる遺構はあるものの、法円坂倉庫群や後続する難波宮下層遺跡の建物群をのぞいては、面的な開発を示す遺構は確認されていない。難波宮北部地区の西に位置するOS06-5次調査地〔大市教・大市協2008〕では5世紀後半のやや蛇行ぎみの溝SD201が検出され、古墳の周溝の可能性があると報告されている(図2)。また、難波宮南部地区の西に位置するOS93-6次調査地では7世紀中頃と8世紀の2時期の盛土層が検出され、円筒埴輪の基底部が多く出土したことから、遷都に伴う開発で破壊された古墳があることが知られている〔寺井2007〕。限られた資料からの推定ではあるが、上町台地の西斜面の高所は墓域となっていた可能性がある。このような上町台地の西辺部と東横堀川の前身であるラグーンをはさんで西に形成された砂州A(後に「浜堤1」と改称〔趙2017、趙・中条2017〕)北端部との間は、東横堀川が大川に合流する地点を中心とした低地を歩いて行き来していたと考えられる。難波津から難波宮下層遺跡の中核部へ向かう場合、おそらくは地形を克服し難い「釣鐘谷」や「本町谷」を避けて大川沿いを東へ進み、谷町筋の東あたりの高所を通ったか、もしくは船の荷を積み替えて田中氏が難波津<sup>3</sup>に推定した「大

手前谷」の水路を利用したか、のどちらかであろう。

今回、難波津の位置については、5世紀の成立期から遷都の前も後も、地形の変化に対応しながら大きくは変わらずに機能していたと考えることができた。これをふまえて、難波遷都前後の「施設」や宮の位置を推定すると、難波遷都より前に史料に現れる「難波館」や「三韓館」などは砂州A（浜堤1）北端部にあっても良いと考えられる。それに対して、遷都の際に長柄豊碕宮が整うまでの間、本拠として使用したとも考えられている大郡宮およびもとの大郡の位置は、ラグーンを越えた行き来が難しいとすれば上町台地西北端の大川に面した高所付近に想定できそうである。

## 2. 推定難波京域の開発

### 1) 研究史と検討の見通し

「難波京」の研究史は積山洋氏によって詳細にまとめられている〔積山2013〕。先行研究の多くは歴史地理学の手法で条坊の復元を行なうものであったが、積山氏は発掘調査によって得られた断片的なデータを丹念に集成し、分析することで「難波京」の復元案を提示した。現在は同氏の案がほぼ定説となっている。

筆者がそれに対して少し気になるのは、積山氏の前期難波京の年代観についてである。積山氏は難波遷都直後の孝徳朝においては、宮殿に南面した地域で前期難波京とは異なる正方位地割の宅地開発が萌芽的に行なわれたとする。飛鳥遷都と孝徳天皇の死によって未完に終わり、次に前期難波京として本格的に条坊が整備され始めるのは天武朝であり、藤原京と並行するものという理解を述べている。これは孝徳朝の次は天武朝という『日本書紀』の叙述する歴史認識に基づくものであるが、以前に筆者は白雉5年（654）の孝徳天皇の死より後に年代づけられる難波Ⅲ新段階において難波宮周辺の開発が継続され、求心力を保っていることを指摘し、『日本書紀』が記さない歴史的事実がある可能性について論じたことがある〔佐藤2017〕。こうした視点であらためて積山氏が提示する調査成果を吟味することで、やや異なる理解が可能ではないかと考えた。

前期難波宮の造営については、古地形の復元と筆者が行なっている土器の編年研究との関係から、難波Ⅲ中段階（図3〔佐藤2000〕）から周辺の谷の埋め立てが始まることがわかっている。その成果から、現在の中央区法円坂を中心にしてできるだけ平坦地を広く確保できる一帯が選地され、前期難波宮の中核部がおかれたことは明らかである。その後、難波Ⅲ新段階には宮域の外側で整地が進んでいることが確認できる。その範囲は、南は大坂城跡南辺部の天王寺区清水谷町周辺であり、西は大坂城跡下層として東横堀川の東側の台地部まで及んでいる。この範囲のなかでは、埋め立てによる整地行為だけでなく、建物の方位が正方位に変化するといった地割の設計・施工を示すような調査事例も増えており、「難波京」が整備され始める段階と考えることができる。

難波Ⅲ新段階までにおいて清水谷町周辺を南限とする開発が行なわれた要因は、ひとつは宮殿の南面を街区とする意識があったと考えられるが、その他にも遷都前に行なわれていた開発の影響については意識しておく必要がある。清水谷町周辺は遷都前には手工業生産の工房がおかれたと考えられている地域である〔田中2014 a・b〕。作業場をつくるための土地の造成や欠かせない水の確保、製品

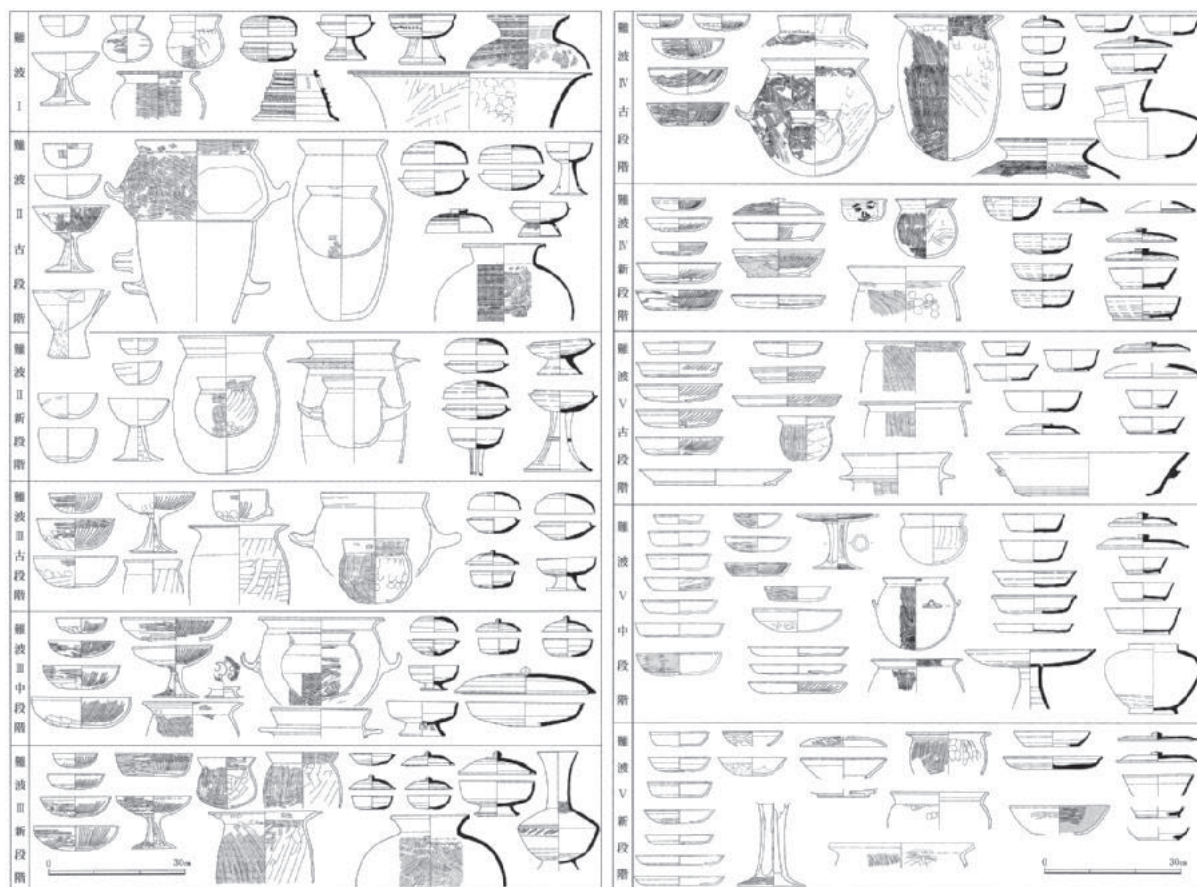


図3 難波地域の土器編年（〔佐藤2000〕fig.179を引用）

を運ぶ経路の整備など、基本的なインフラが整っていたことから、京の整備といった規模の大きな事業にも早期に対応できたのではないかと考えられる。こうした手工業の工房が集中する地区から居住区画への移行という現象は、近世や近代などにおいても都市域が拡大する際に時代を越えて見られるものである。

難波Ⅳ古段階になると、宮域における土器の出土は激減して、難波Ⅲ新段階までのような面的な開発はいったん途絶えてしまう。ただし、まったく出土資料が見られなくなるわけではなく、上町台地の東縁辺部や、清水谷町周辺よりもさらに南方の四天王寺周辺と位置づけられる範囲で良好な資料が得られている。これらがどのような開発に伴うものかは後で述べることにする。

## 2) 上本町遺跡にみる開発の展開

上で述べた前期難波宮期における開発の南限が天王寺区清水谷町周辺であるという事実は、高橋工氏が整理した上本町遺跡周辺の遺跡の動向からも確かめることができる〔高橋2012〕。図4の■と●の分布はそれぞれ飛鳥時代、奈良時代の遺構発見地点を高橋氏が示し、筆者が資料を確認して改変を加えたものである。主な改変点としては、上本町遺跡の北部に分布する●のうち、あるものは●を■に変え、あるものは●に加えて■を併存させたことである。ここから読み取れることは、8世紀の遺構がある地点は7世紀にもすでに遺構があってそれに引き続くかたちで見られ、8世紀になって新たに遺構が見られる地点はないこと、7世紀のみの地点は時期が判明するものは難波Ⅲ新段階までに限られて、明らかに難波Ⅳ古段階に降るものは見られないことである。



図4 上本町遺跡周辺における7・8世紀の遺構・遺物確認地点  
〔高橋2012〕図33を下図として引用・加筆

それに対して、同遺跡の南部は●が多く、数少ない■は北部とは逆に難波Ⅳ古段階の遺構が大半である。高橋氏はこの図をもとに8世紀になると遺跡全体に遺構の分布が広がるとみているが、調査件数が少ないことはあるとしても、やはり遺跡の中部には今のところ当該時期の遺構はほとんどない。市川創氏は遺跡中部のU H13-3次調査（図4の▲）について、重なって検出された溝S D301・302のうち、下位のS D302を「古代の条坊側溝とみられる」としている〔市川2015〕が、この溝からは瓦器が出土している〔大市教・大市研2015〕。上位のS D301は埋土から豊臣期の陶磁器が出土しておりS D302より大きく年代が降ることから、この瓦器は混入とは言えない。また、この調査地から南西約200mの地点で行なわれたU H15-1次調査では、坊間路推定ラインに沿って南北溝が検出された（図4の◆〔大市教・大市研2017〕）。しかし、埋土に平安時代後期以降の土師器や瓦器が含まれることや、想定される路面上に古代のものと考えられる柱穴（明確な時期は不明）が存在することから、後述する難波宮廃絶後の遺構である可能性が否定しきれず、いったん評価を保留している<sup>4</sup>。

### 3) 「前期難波京」の再検討

それでは上で行なった上本町遺跡周辺での検討もふまえて、一部取り上げる調査地が重なるけれども、積山洋氏によって提唱されている「前期難波京」〔積山2013〕の遺構の年代を再確認する。積山氏は難波宮域外において検出されている正方位の建物跡や溝の位置関係を詳細に集成・検討し、難波地域にも方格の地割が存在することを明らかにした。そのうち、1尺=およそ29.5cmを基準とする地割について、藤原京と並行して7世紀後葉～末に設定されたものを「前期難波京」（難波京Ⅱ期）として位置づけた。こうした方格の地割は、その後8世紀に「後期難波京」としてより広範囲に認められるようになるが、その際の基準尺は同時期の尺ではなく「前期難波京」のものを踏襲すると考えられている。以下、積山氏がこの時期の資料として挙げている発掘調査成果について、その根拠についてみていくことにする。

① O S88-97次調査 東西溝S D503が検出された〔大市協2002〕。報文では田辺昭三氏の編年によるTK209型式の須恵器細片が出土したとされている。細片なので詳細な年代は絞り込めないとしても、この土器からみるかぎり埋没が7世紀後葉まで降ることはない。この溝が積山氏の条坊復元ラインに合う位置に存在していることは注目される。

② S S95-2次調査 5b-2層（難波Ⅲ中～新段階を下限とする土器を含む）上面でS D509・510・511といった東西溝が検出された〔積山2013、大市研2015〕。S D509・510は道路側溝の可能性が指摘されている。S X501の埋土からは難波Ⅳ古段階の土器が出土した。これらの溝の性格について、後述するように京嶋覚氏は東側の低地における灌漑用の水路と位置づけている〔京嶋2018〕。条坊想定ラインにある溝が必ずしも宅地の区画用でなかった可能性を示す事例として重要である。

③ U H08-8次調査 南北溝S D01が検出された〔大市教・大市協2010〕。埋土からは難波Ⅲ中段階頃の土師器高杯が出土した。この溝も年代の明らかな遺物が少ないものの、7世紀後葉よりも早い時期に施工されている可能性が高い。

④ S D08-2次調査 溝S D01・02が検出された〔大市教・大市協2010〕。S D02はS D01とほぼ

同位置でこの溝に切られる。S D01からは和同開珎のバリ銭が出土しており8世紀の遺構である。S D02は切り合いからそれより古い、須恵器細片が出土しただけで年代は明らかではない。また、この調査地も上町台地より東方の低湿地に位置しており、溝は宅地用でなかった可能性がある。

⑤四天王寺東門 正式の発掘調査報告書は刊行されていないが、澤村仁氏が調査成果の概要について紹介している〔澤村1981〕。それによると、最下層検出の門は柵門で、その柱穴掘形の埋土から格子叩き目の平瓦が出土し、上位層から出土した「十葉重弁蓮花文の軒円瓦」の年代を含めて白鳳期の創建と考えている。創建年代の根拠とされている格子叩き目の平瓦については、7世紀後半のどのあたりの年代に絞り込めるかを判断するのは難しい（8世紀にも後期難波宮などで使用事例がある）が、澤村氏は上位層で出土した軒丸瓦とあわせて「白鳳期の初期」「大化・白雉年間」という年代を考えていたようである。現段階では、今後、所用瓦の整理ができるまで年代の定点とすることを控えておくのが穏当であろう。

⑥S T96-4次調査 南北溝S D01が検出された〔大市協1999〕。埋土からは難波Ⅳ新段階～難波Ⅴ古段階の土器が出土している。積山氏はこの溝が上記③のU H08-8次調査S D01の南延長線上にあることから7世紀に施工が溯る可能性を指摘する。しかし、この2地点は1.5km以上離れており、かつその間に位置するU H09-2次調査地では橋梁遺構S B600・601が架けられたのが難波Ⅴ古段階であることが確認されている〔大市研2010〕。

⑦U H08-9次調査 道路側溝は検出されなかったが、南北道路推定位置で井戸S E105が検出された〔大市研2012〕。埋土からは難波Ⅳ古段階の土器が出土し、7世紀後葉に廃絶しているが、南隣の敷地でのU H09-2次調査では上記のとおり難波Ⅴ古段階に架けられた橋梁遺構S B600・601が見つかり、谷の底を通るような成形が行なわれた形跡もない。道路が敷設されたとしても8世紀第2四半期以降に降ることは明らかである。

以上で整理したように、積山氏が挙げた前期難波京の条坊に関わる遺構は、①③のように清水谷町周辺から上本町遺跡北部にあって難波Ⅳ古段階＝7世紀第4四半期（≒天武朝期）よりも古い時期に施工された可能性が高いもの、⑥⑦のように施工が難波Ⅳ新段階～難波Ⅴ古段階＝8世紀前半であると考えられるもの、②④のように時期は天武朝期に近いけれども、灌漑用など宅地の区画用ではなかった可能性があるものに分けられる。なお、⑤は正報告書が未刊行なので澤村氏の記述にある瓦の年代が絞り込めない。

以上の検討結果からみれば、積山氏が述べたように天武朝において前期難波京（難波京Ⅱ期）の条坊がある程度まとまって整備されたという根拠は弱いと考える。先述のとおり、難波京の設計は難波Ⅲ新段階までに行なわれていた可能性がある。清水谷町周辺～上本町遺跡北部では一部施工されたが、あとは8世紀に入ってからであり、また、それ以外に上町台地東縁部ではその設計ラインを利用して宅地の区画用ではない灌漑用などの溝が掘られる、といった状況をみてとることができた。

これまで上本町遺跡周辺や前期難波京について検討した結果、難波Ⅲ中～新段階に行なった開発と難波Ⅳ古段階から後期難波宮期の難波Ⅴ新段階にかけて行なった開発とは少数の例外をのぞいて地域が基本的に重ならないことがわかる。これに対して、積山氏が挙げた調査事例について上のような

年代分けを行なっても両方で分布が重なる地域がある。それは難波宮から北西方に位置する大川南岸の地域である。市川創氏が行なった分析〔市川2017〕によれば、積山氏が挙げている溝などの事例は条坊想定位置に合わず、掘立柱建物の分布をみても条坊想定ラインに干渉するものがあることから、京には含まれていなかったと結論づけている。しかし、この地域はむしろ7・8世紀の遺構・遺物が他の地域よりも多く見つかっており、先の図2のように5・6世紀の遺物まで出土するなど早くから開発が進んでいたところである。市川氏は難波宮跡周辺の上町台地の古地形復元をGISの手法を活用して検討し、時代別、地区別に盛土量を推定する試みを行なっている〔市川2017〕。その結果をみても、この地域は宮域に次いで土量変化が少ないところで、南に隣接する宮域西方の地域と比べると約6分の1で済むというデータが出ている（地形は図2を参照いただきたい）。宮域西方地域ではこれまで条坊に関わる良好な遺構が見つかっていないことから、このデータは有意なものと考ええる。おそらく大川南岸の地域では、遷都前から開発が進み、公的な施設（たとえば大郡とか）もおかれたような状況で、何もないところに計画線を引くような条坊の設計は難しかったのであろう。すでに何らかの区画が存在した可能性もある。

それぞれの開発の事情はまったく異なるかもしれないが、8世紀に行なわれた開発の結果として、遺構・遺物の分布が難波宮北西方の大川南岸地域と四天王寺周辺地域のふたつに大きく分かれたことは事実であり（前者の広がりには東横堀川を越えて西に及ぶ）、今後も大きな認識の修正は必要ないものと思われる。難波地域は長岡京遷都により宮殿が廃絶しても、平安京をのぞく他の都城のように一部に貴族の別業が残りながらもしだいに農村へ戻っていく流れではなく、大きくは上に挙げた南北の地域に二極分化しつつ、都市的な姿をとどめて中世へつながっていく流れがあると、これまでは理解されてきた。筆者もそれは長岡京遷都後に起こる現象と認識していた〔佐藤2015〕が、今回の分析によって、後期難波京の整備段階ですでに始まっていたことが明らかとなった。

次では難波京研究の諸問題として、宅地の区画以外と考えられる開発の事例についてさらに詳しくみるとともに、京南部の整備に関わると考えられる寺院の造営の進展や、難波宮廃絶後にも見られる難波京の条坊プランに影響を受けた地割の事例を挙げて、難波京の開発の特質について考える。

### 3. さまざまなかたちの開発 ―「難波京」から中世へ―

#### 1) 上町台地東縁部における開発

最近、平成15～18年度に実施された細工谷遺跡発掘調査の報告書が刊行された〔大市研2018〕。この成果のなかで、SD05-1・06-1次調査においては上町台地の東斜面に営まれた難波Ⅲ新段階で廃絶する塀を伴う建物群（柱列）を検出している。この建物群が廃絶した後に難波Ⅲ新段階の土器を含みながら難波Ⅳ古段階を上限とする第5層の水成層が堆積する。さらにこの上位にも難波Ⅳ古段階の土器を多く含む第4b層の水成層があり、その地層を母材として第4a層の水田が営まれる。

京嶋覚氏はこうした調査成果を分析して、他の上町台地東縁部において難波Ⅳ古段階の土器を含む水成層の上位に水田作土層が確認できる事例として森の宮遺跡や宰相山遺跡の事例をあわせて挙げている〔京嶋2018〕。そのうち、宰相山遺跡SS95-2次調査地では第5b層上面<sup>5</sup>で検出された溝

S X501から難波Ⅳ古段階の土器が出土した〔大市研2015〕。同層準の溝群のうち、ほぼ正東西の方位のS D509・510は幅3 m前後の道路側溝と積山洋氏は考えている〔積山1999・2013〕。これに対して京嶋氏は東側低地部の水田への灌漑用水路としての機能も考慮する必要があると指摘している。これらの調査地よりもさらに東方は中世か近世によく人間の活動の痕跡が確認される低湿地であり、そういった方向への宅地開発は困難であったと考えられるので、京嶋氏の考察は妥当である。先に積山氏が前期難波京の条坊に関わる遺構として挙げたS D08-2次調査の溝S D01・02は宅地の区画用というよりはむしろ低湿地において水田を維持するためのものと考えられる。

また、京嶋氏はこうした水田開発のなかでも細工谷遺跡の事例を百済郡（評）における堂ヶ芝廃寺（「摂津百済寺」）や「百済尼寺」の造営・整備と結び付け、その背景に百済王氏の台頭を考える興味深い指摘を行なっている。京嶋氏は「居住地の近辺に新たな水田を造成し、（百済王）善光への封戸に当てた」という解釈をしているが、5世紀以来、朝鮮半島からの渡来民の活動拠点になっていたところを核として、条件が悪く未開発地であった土地の開発の権限を百済王氏のような渡来系氏族に与えていった結果なのではないかとも考えられる。

## 2) 四天王寺・堂ヶ芝廃寺の造営

8世紀の後期難波京における整備の中心となった地域のひとつである四天王寺周辺について考えるために、いちど四天王寺の造営の動きをみておきたい。その際、主要な所用軒丸瓦のひとつが上でみた堂ヶ芝廃寺（「摂津百済寺」）の創建瓦と同範であることが手がかりにならないかと考えている。

四天王寺は7世紀に創建されて以来、現在に至るまで法灯を伝えるわが国を代表する古代寺院である。戦後の伽藍復興に伴って行なわれた国営発掘調査の結果、四天王寺の中心伽藍のうち、最も早く造営されたのは金堂と塔であり、中門・回廊・講堂はやや遅れるとされている〔文化財保護委1967〕。かつて筆者はこの寺の創建年代について検討したことがあり〔佐藤1999〕、創建時の軒丸瓦（網伸也氏の分類〔網1997〕によるNMⅠa型式、図5、以後型式名はこの文献による）を焼いた楠葉平野山瓦窯（京都府八幡市・大阪府枚方市）で出土する須恵器の大半の年代を難波Ⅲ古段階にほぼ並行するものとした。さらに、それに次ぐ「第2期の造営」の所用瓦としてNMⅡa型式を挙げた。この軒丸瓦は舒明天皇の命によって造営された百済大寺に比定される吉備池廃寺と同範であり、『日本書紀』大化4年（648）2月己未条「阿倍大臣請四衆於四天王寺、迎仏像四軀…」の記事を難波遷都に深く関わった阿倍倉梯麻呂による四天王寺の整備と結び付けて理解されている。それに対して、現在行なわれている四天王寺の既調査出土瓦の整理作業の成果について、谷崎仁美氏が興味深い事実を紹介している〔谷崎2018〕。注目されるのは、NMⅡa型式が割合としては少なく、同系統の軒丸瓦ではNMⅡa型式に後出するとされるNMⅡc型式が主体となることが明らかになった点である。

四天王寺における創建軒瓦とそれに後続する軒瓦の編年的理解については伽藍復興に伴う発掘調査の報告書〔天沼編1936・文化財保護委1967〕や網氏などによって検討され、年代論に関しては一定の理解ができているが、創建伽藍の造営がどの型式の瓦によって進められたかについては、どの型式の軒瓦がどの伽藍でどれくらいの比率で出土しているかという基礎的データが、戦前の昭和11年刊行の

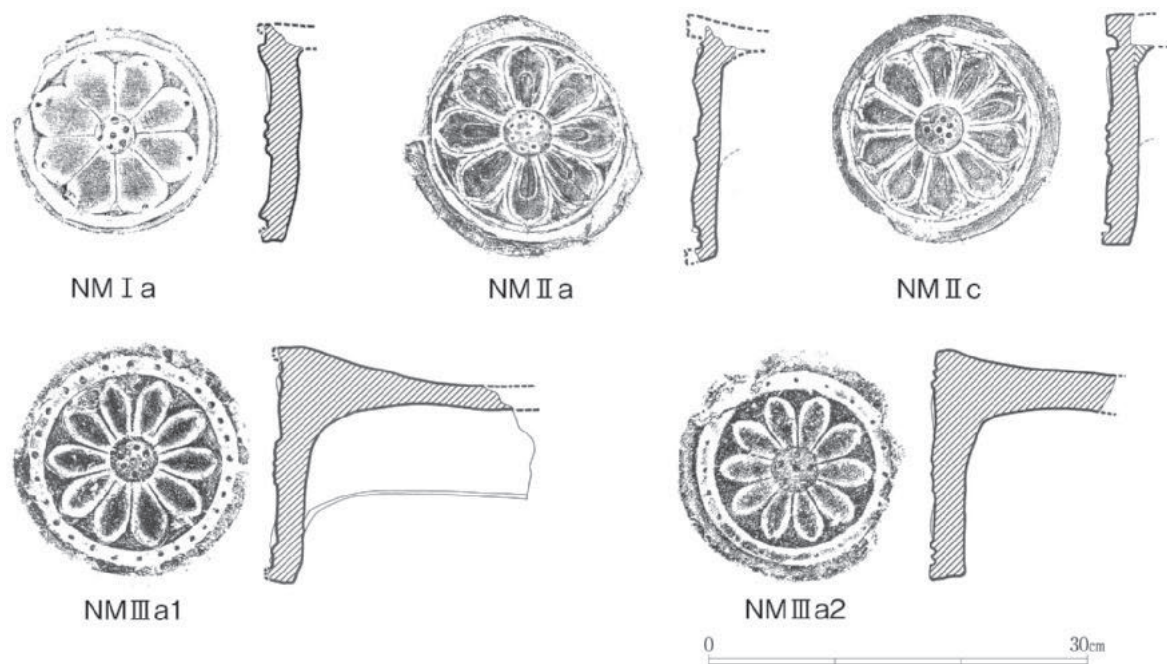


図5 四天王寺出土軒丸瓦（〔四天王寺文化財管理室1986〕各図版から引用）

報告書〔天沼編1936〕の後は公表されていなかった。そのため、金堂と塔とおそらくは中門にはNM Ia型式が主に用いられたと推定できるものの、それ以後の伽藍の造営の主体となった型式は明らかではない。今回の未報告瓦が整理された結果、NM II a型式が網氏の第Ⅱ期（NM II a・b・c型式と複弁蓮華文2型式などによる）のうち約20%にとどまることがわかり、難波遷都を契機とすると想定される大規模な整備の主体とはなりえないことが明らかとなった。同型式はNM Ia型式とともに楠葉平野山瓦窯で焼かれており、金堂と塔に続く中門の造営段階くらいにNM Ia型式を補充する瓦として用いられたとも考えられる。一方、NM II c型式は第Ⅱ期の軒丸瓦において約75%を占めるとのことである。戦後の国営発掘調査の報文〔文化財保護委1967〕によれば、回廊と講堂が造営されたのは「奈良時代前期」（＝白鳳期）である。そのうち講堂の主体となった軒丸瓦としては北縁の屋根落下に伴う瓦層に多く見られたNM III a 1型式<sup>6</sup>が知られており、それよりもNM II c型式は丸瓦部の接合位置から先行するものと考えられている。回廊と講堂にこうした型式がどれくらいの比率で使用されていたかがわかるデータは今のところないが、金堂・塔・中門の竣工段階と回廊・講堂の造営の主体となったのがこれら2型式であったことは確かであろう。

NM II c型式は同じ難波地域の堂ヶ芝廃寺でも出土しており、この寺の創建に用いられた可能性がある。戦前に発見された礎石の型式（現在は所在不明）や『日本霊異記』の記載から藤澤一夫氏によって「摂津百済寺」であったと推定されている。谷崎氏はNM II c型式の上限年代は660年を降ることはないとし、四天王寺や堂ヶ芝廃寺の造営が母である斉明天皇の菩提を弔い、国の守護と百済復興を願ったものと評価している。こうした立論の根拠のいくつかや、背景の推定については同意できないところもあるが、瓦当文様はNM II a型式に影響を受けたものであることは明らかなで、瓦当部を薄づくりにするところが似ており、その後は丸瓦部の接合位置が低くなり、補充粘土の量が増加するなど、瓦の製作技法が変化していくこと、7世紀後葉以降に細工谷遺跡周辺における「百済尼寺」の創建（同

遺跡のNMⅠa型式はここでは考えない)とともに堂ヶ芝廃寺の整備が法隆寺式軒丸・軒平瓦を用いて行なわれたとすると、NMⅡc型式はそれ以前の年代に絞り込めることから、660年前後とする暦年代についてはおおむね妥当であると考ええる。これは、『日本書紀』天智3年(664)3月条「百済王善光王等を以て難波に居らしむ」で表わされているような当時の百済からの渡来民の増加が堂ヶ芝廃寺(「摂津百済寺」)造営の契機になったとみられることとも整合している。

先に検討したように、前期難波宮造営後にその南方で進められた開発は大坂城跡南辺部(天王寺区清水谷町周辺)から上本町遺跡北部まででいったん途絶える。ただし、上記S D05-1・06-1次調査の建物群のように、離れた地点にも同時期の遺構は散在している。これらの建物群がすでに百済王氏に関わるものかどうかは決め難いが、少なくとも京嶋氏の指摘どおり難波Ⅳ古段階以降の水田開発にはこの氏族が深く関わり、そうした動きのなかで「摂津百済寺」や「百済尼寺」の造営・整備が行われたのであろう。そうみると、8世紀から9世紀にかけての四天王寺周辺におけるさまざまな開発と細工谷遺跡周辺での動きを結び付けて考えることができるかもしれない。

### 3) 中世に残る正方位の地割

これまで検討してきた古代だけでなく、中世にも条坊道路推定ラインに合致する遺構が見られることを高橋工氏が指摘している〔高橋2011〕。高橋氏は四天王寺周辺の埋没した谷地形と条坊道路推定ラインに合致する遺構との関係を整理するなかで、古代においては開発がまだ及んでいない地形が埋め立てられて平坦地になった中世の段階で難波京の条坊ラインに合致した遺構がつくられたと述べている。この要因として、台地高所で踏襲された条坊道路が谷を埋め立てた後に延長されたという可能性を考えている。

市川創氏はさらに検討の範囲を広げて、上町台地やその周辺で検出された中世の正方位の遺構(溝・堀)、正方位に則らない遺構の集成を行なっている〔市川2015〕。その結果、古代に難波京が設計・施工されたと考えられる範囲のうち、高燥な平坦面が広がる上町台地西半を中心として、中世の正方位の遺構が分布することを明らかにした。市川氏の分析によると、こうした遺構は難波京条坊想定ラインと一致ないし近似するものも多く、難波京の地割が中世にも引き継がれたと評価している。

これらの遺構には屋敷地の区画とみられるものがあり、より防御施設としての性格が強いと考えられるものもある。また、付近に人間が居住した痕跡の薄い地点もあるので、耕作地の区画に用いられた事例もあると考える。こうした中世における地割の性格の多様さは、先に述べたように難波Ⅳ古段階の頃から灌漑用水路と考えられる溝が見られるなど、居住地であれ、耕作地であれ、開発の基準線が共有されるかたちで、難波宮が存在した時期にはすでに現れていたことと言えよう。

### むすびにかえて

ここまで、難波地域が都市として発展するうえで重要な構成要素である難波津と難波京に関して述べてきた。これらは、一見別々の論文で扱っても良さそうなほど内容の重い存在であるが、難波地域の開発というキーワードによって両者をみることで、5世紀の法円坂倉庫群の造営と難波津の成立か

ら難波遷都、難波京の整備を経て、中世の大阪へとつながっていく大きな流れのなかにこれらを位置づけることができたと考える。

難波津は5世紀に整備されて以来、東横堀川の前身であるラグーンが大川に合流する地点を中心に、西は上町台地西北の裾部あたりから船場城下町下層の東北部あたりまでの一帯から大きくは動いていないと考えられる。その周囲にあった施設や集落は、8世紀になると範囲を西へ拡大するが、その盛期は後期難波宮が造営されて一時的に皇都となった8世紀前半よりも、むしろその後の8世紀後半から9世紀にかけてであることは興味深い。

一方、難波京として認識できる地割は、前期難波宮が造営されてその求心力を保っていた難波Ⅲ新段階（7世紀第3四半期）には設計されており、一部では施工も行なわれたことを今回明らかにできたが、難波Ⅳ古・新段階（7世紀第4四半期～8世紀第1四半期）にはその地割の一部は居住区の区画ではなく新たに拓いた耕作地への灌漑に用いられた可能性がある。その後、難波京の整備は後期難波宮が造営された難波Ⅴ古段階（8世紀第2四半期）以降に再び展開していく。ただし、条坊と理解される地割の施工は必ずしも7世紀の延長ではなく、難波宮域の北西方にある大川南岸の高所か四天王寺の周辺というかたちですでに南北の二極分化が始まっている。また、上本町遺跡U H09-2次調査地では、条坊道路の推定位置に8世紀前半の橋が検出され、その後、8世紀後半から9世紀初頭にかけて谷が埋め立てられていることが確認された〔大市研2010〕。前者の谷に架けられた橋は後期難波宮造営に対応する京の整備と理解されるが、後者の谷の埋め立てはそれとは異なった目的があり、かつ橋を架けるより土木工事としては大規模なものと評価できる。

こうした営みには、先にみたような皇都ではなくなった8世紀後半から9世紀にかけて難波津周辺で遺構・遺物が増加する動きと相通ずるものがあるように思われる。それは、「律令制」や「条坊制」といった枠組みのなかで考えられている古代都城の造営・整備とは異なる動きであると筆者には見える。その底流には、冒頭にも触れたように難波地域が遷都以前からもつ「都市の様相」があり、遷都後に宮殿の造営や京および難波津周辺の整備が展開していくなかでも、その特性は受け継がれていったのであろう。今後はそうした視点を手がかりに、他の都城遺跡の実態とも比較しながら、どのような人々によって難波地域の開発が進められたのかについて検討を続けたいと考える。

## 註

- (1) 2009年度から5年間にわたって行なわれた科学研究費補助金による「大阪上町台地の総合的研究－東アジアにおける都市の誕生・成長・再生の一類型－」では、古地形の復元、土器・瓦をはじめとする考古資料の検討、花粉・種子などの自然科学分析、史料といったさまざまな側面からの研究が相互に関わりながら進められた〔大市研・大歴博2014〕。またこれに続く南氏の科学研究費補助金による「古墳時代における都市化の実証的比較研究－大阪上町台地・博多湾岸・奈良盆地」などによる共同研究の成果がある。
- (2) 本論では特にことわらないかぎり、「遷都」を7世紀中頃に行なわれた難波遷都を指すものとして述べる。
- (3) 古代の史料において「難波津」の語が示す地点・施設は、特に5～6世紀では、今回取り上げた東横堀川と大川の合流地点周辺のみではなく、田中清美氏の推定する「大手前谷」や、上町台地の東側を含めた複数の地点・施設を総称するものであった可能性は考えておく必要がある。

- (4) 上本町遺跡中部で7・8世紀の遺構が希薄な状況は、調査件数が少ないことに加えて、後世の遺構や地層に当該期の土器・瓦が含まれる事例が散見されることから、生活面が削平された結果と考えることもできるが、同遺跡の北部と南部で遺構の年代が大きく分かれる事実は変わらない。
- (5) この調査の正報告書〔大市研2015〕では、調査担当者の積山洋氏による資料紹介〔積山1999〕で記述されていた第5b層の細分(「5b-1層」「5b-2層」)が示されていないが、5b-2層は第5b層に対応し、5b-1層は第5b層上面の溝の埋土に当たる。
- (6) 四天王寺のNMⅢa1は丸瓦部の接合位置がNMⅡcより低くなっているものの、瓦当はまだそれほど厚くない。それに対してNMⅢa2はⅢa1より外区の珠文数が減少して疎らになるなど後出の要素があり、前者は7世紀後半、後者は8世紀に降ると考えられる。これは戦前の復興に伴う発掘調査報告書〔天沼編1936〕以来、『四天王寺古瓦聚成』〔四天王寺文化財管理室1986〕まで一致した年代観である。

## 【引用・参考文献】

- 天沼俊一編1936、『四天王寺図録 古瓦篇』、四天王寺
- 網伸也1997、「四天王寺出土瓦の編年的考察」『堅田直先生古希記念論文集』、真陽社、535-551
- 市川創2015、「中世難波地域の遺構方位と地割」『郵政考古紀要』第62号、大阪・郵政考古学会、164-197
- 2017、「難波宮・京の設計と実際」『都城制研究』(11) - 日本古代の都城を造る -、奈良女子大学古代学  
学術研究センター、57-70
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 (2006)』  
2010、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 (2008)』
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 (2013)』  
2017、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 (2015)』
- 大阪市文化財協会1992、『難波宮址の研究』第九  
1999、『大阪市内埋蔵文化財発掘調査報告 - 1997年度 -』  
2002、『大坂城跡』Ⅵ  
2003、『大阪市内埋蔵文化財発掘調査報告 - 2001・2002年度 -』  
2004、『大坂城下町跡』Ⅱ
- 大阪文化財研究所2010、『上本町遺跡発掘調査報告』Ⅰ  
2012、『上本町遺跡発掘調査報告』Ⅳ  
2015、『大阪市北部遺跡群発掘調査報告』  
2018、『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 大阪文化財研究所・大阪歴史博物館2014、『大阪上町台地の総合的研究 - 東アジア史における都市の誕生・成長・  
再生の一類型 -』(研究代表者：脇田修)
- 門脇禎二1991、「いわゆる、『難波遷都』について」『「大化改新」史論』下巻、思文閣出版、3-18 (初出1972)
- 京嶋覚2018、「細工谷遺跡周辺の古環境と人間活動」『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅲ、大阪文化財研究所、75-81
- 栄原永遠男2017、「難波屯倉と古代王権 - 難波長柄豊碕宮の前夜 -」『大阪歴史博物館 研究紀要』第15号、19-  
32
- 鷺森浩幸2014、「難波と大和王権 - 難波屯倉・難波長柄豊碕宮 -」『続日本紀研究』第412号、1-21
- 佐藤隆1999、「四天王寺の創建年代 - 土器・瓦の年代決定をめぐる一」『大阪の歴史と文化財』第3号、大阪市  
文化財協会、19-24
- 2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」『難波宮址の研究』第十一、大阪市文化財協会、253-  
265

- 2015、「遺物からみた難波宮廃絶から中世大阪まで」『大坂 豊臣と徳川の時代－近世都市の考古学－』、高志書院、22－27
- 2017、「難波と飛鳥、ふたつの都は土器からどう見えるか」『大阪歴史博物館 研究紀要』第15号、1－18
- 澤村仁1981、「難波京と四天王寺 その他一・二の問題について」『難波宮址の研究』第七 論考篇、大阪市文化財協会、93－104（『日本古代の都城と建築』中央公論美術出版、1995に加筆再録）
- 四天王寺文化財管理室1986、『四天王寺古瓦聚成』、柏書房
- 積山洋1999、「難波京東部域の発掘調査」『大阪市文化財協会 研究紀要』第2号、381－398
- 2013、『古代の都城と東アジア〈大極殿と難波京〉』、清文堂出版
- 2015、「大化前代の難波－難波宮下層遺跡を中心に－」『市大日本史』第18号、大阪市立大学日本史学会、12－33
- 高橋工2011、「四天王寺東方の埋没地割と難波京条坊」『上本町遺跡発掘調査報告』Ⅱ、大阪文化財研究所、23－26
- 2012、「古代の上本町遺跡」『上本町遺跡発掘調査報告』Ⅳ、大阪文化財研究所、41－45
- 田中清美2014 a、「難波宮成立前夜の上町台地北部の手工業生産と流通」『大阪上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－』（研究代表者：脇田修）、大阪文化財研究所・大阪歴史博物館、65-74
- 2014 b、「古代難波地域の渡来人－五～六世紀を中心に－」『難波宮と都城制』、吉川弘文館、178－195
- 谷崎仁美2018、「七世紀後半における寺院造営とその背景－四天王寺と堂ヶ芝廃寺を中心に－」『地より湧出した難波の大伽藍－四天王寺の考古学－』、四天王寺勸学部、30－38
- 趙哲済2004、「大坂城下町跡の自然地理的背景について」『大坂城下町跡』Ⅱ、大阪市文化財協会、347－350
- 2017、「大阪海岸低地における古地理の変遷、その最新情報」『難波宮下層遺跡と上町台地北端部の開発』発表要旨集、大阪歴史学会、1－12
- 趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也2014、「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」『大阪上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－』（研究代表者：脇田修）、大阪文化財研究所・大阪歴史博物館、9-22
- 趙哲済・中条武司2017、「大阪海岸低地における古地理の変遷－『上町科研』以降の研究－」『ヒストリア』第264号、大阪歴史学会、3－23
- 寺井誠2007、「孝徳朝難波遷都に伴う古墳の破壊」『大阪歴史博物館 研究紀要』第6号、49－62
- 直木孝次郎1994、『難波宮と難波津の研究』、吉川弘文館
- 西本昌弘2014、「改新政府と難波大郡宮・小郡宮」『日本書紀研究』第30冊、塙書房、249-276
- 文化財保護委員会1967、『四天王寺』埋蔵文化財発掘調査報告第六、吉川弘文館
- 松尾信裕2014、「古代難波の地形環境と難波津」『難波宮と都城制』、吉川弘文館、20－37
- 2018、「古代・中世の船場地域の景観」『大阪歴史博物館 研究紀要』第16号、19－32
- 南秀雄2018、「上町台地の都市化と博多湾岸の比較－ミヤケとの関連」『大阪文化財研究所 研究紀要』第19号、1－21
- 吉田晶1977、「地域史からみた古代難波」『難波宮と日本古代国家』、塙書房、245－304
- 1982、『古代の難波』教育社

## The Various Aspects of the Developments in Ancient Naniwa Region -Reinvestigation on Naniwa Port Site and Naniwa Capital Site-

SATO Takashi

In this paper, the author indicated new views about two subjects mentioned below about the developments in ancient Naniwa region.

The first is concerned with Naniwa Port Site. In the developments in Naniwa region which started in the 5th century, various facilities, clusters of warehouses and factories of manual industry were set up in the Uemachi Upland and surrounding area. As a result, the character as the city was formed in the region toward the capital transfer to Naniwa Palace. Naniwa Port supported the prosperity of Naniwa region as the base for foreign affairs and trade. The author reexamined archaeological materials concerned with presumption about location of Naniwa Port Site in an early stage and newly estimated the historical value.

The second is concerned with Naniwa Capital Site. The time when the divisions of land in Naniwa Capital were formed after the capital transfer to Naniwa Palace has been currently regarded during Tenmu Emperor's reign (the fourth quarter in the 7th century). On the other hand, the author indicated a possibility that the time was in the third quarter in the 7th century and considered the historical process that the divisions of land were formed by the developments by the various aims under the influence of the urbanization seen before the transfer and the divisions were remained until the Middle Ages.